

**[-3]型アクセント規則の韻律音韻論からの再考
—外来語と複合名詞のデフォルトアクセント型の統合分析—**

稲葉 生一郎

カリフォルニア州立大学 サンノゼ校
sinaba@email.sjsu.edu

**A Metrical Approach to the Antepenultimate Accent Rule in
Japanese: An Integrated Analysis of the Default Accentuation in
Loanwords and Nominal Compounds**

Seiichiro Inaba

San Jose State University

Abstract:

In this paper, I will first discuss under Metrical Phonology that the foot formation process of loanwords with four or shorter morae is different from those with five or longer morae. Secondly, by referring to Inaba (2004) that describes the foot formation process of nominal compounds (N1・N2) with a four or shorter mora N2 differs from those with a five or longer mora N2, I will show that feet are constructed in the same way for both loanwords and nominal compounds depending on the length of the domain. Once feet are constructed, the generalization for the default accentuation of both loanwords and nominal compounds is always the same. Specifically, the accent falls on the non-final, rightmost foot.

This generalized accentuation rule also predicts the position of the main stress in Latin. Even though loanwords and nominal compounds are very different from each other in the word formation process and writing, since they comply with the same versatile rule, there will be a good possibility that they can be utilized as a useful tool in teaching Japanese rhythm.

1. はじめに

『NHK 日本語発音アクセント辞典』(1998)に、「4拍(モーラ)以上の外来語は、終わりから数えて3拍目まで高く発音する」と明記されている。確かに、古く入った語など日本語になりきった語は平板型(例:アルコール、アンテナ、オムレツ、キャラメル、サボテン)も存在するが、一般的には4拍以上の外来語のアクセント核は、(1)に示すように語尾から3番目のモーラに置かれると言える。

- (1) スカ¹ート、ブラ¹ウス、ストラ¹イキ、チョコレ¹ート、ヒューマニ¹ズム、
マクドナルド、インフルエ¹ンザ

ただし、語尾から3番目のモーラが特殊拍（撥音、促音、長音：下線で示す。）の場合、(2)のようにアクセント核は前へ1モーラずれる。

- (2) エ¹ンジン、カレ¹ンダー、アタ¹ッカー、デラ¹ックス、コマ¹ンシャル、
コンピュ¹ーター

そこで、音節という単位を使うと、(2)に示す外来語も、(1)に示す外来語と同様に「語尾から数えて3番目のモーラを含む音節にアクセント核が置かれる」(McCawley 1968)と一般化することができる。これを[-3]型アクセント規則とよぶ。(以後、[-3]型規則)。

一方、『NHK 日本語発音アクセント辞典』(1998)に、2拍と3拍の外来語は、(3)のようなアクセント核が語頭に置かれる頭高型であると説明されている。

- (3) ガス、パン、クラ¹ス、テレ¹ビ、ファ¹イル、タンク、ボ¹イス、ハ¹ワイ、
ギ¹ター

つまり、3拍の外来語はアクセント核が語尾から3番目のモーラに置かれる[-3]型ではなく、2拍の外来語同様に単純に語頭から決定されることになる。2拍の外来語と異なり、3拍の外来語のアクセント型は、[-3]型規則により、語尾から決定されるとも言えるが、比較的短いため、単純に語頭から決定される頭高型と考える方が確かに自然である。しかし、その理由は説明されてはいない。

本稿では、外来語のアクセント型を、フットを基礎にした韻律音韻論から考察する。そして最適性理論による外来語の研究¹(Katayama 1998)の統計データも踏まえ、4拍の外来語のデフォルトアクセント型（多数派型）

のフットは、3拍以下の外来語同様、語頭から構築され、比較的長い5拍以上の外来語のフットは、語尾から決定されることを議論する。つまり、外来語のアクセント型は、従来3拍以下と4拍以上で異なると考えられてきたが、4拍以下と5拍以上で異なることを議論する。さらに、外来語のデフォルトアクセント核は、「非語尾・最右端フット（‘the non-final, rightmost foot’）に置かれる」と一般化する。

一方、稲葉 (2004) では、複合名詞 (N1・N2) のフット構築過程は、N2が4拍以下と5拍以上で異なることを議論した。さらに本稿では、複合名詞のデフォルトアクセント核も、外来語同様に、「非語尾・最右端フットに置かれる」(Kubozono 2002) と一般化する。つまり、形態の全く異なる外来語と複合名詞が同じ韻律規則に従っていることになる。またこの韻律規則がラテン語の主強勢規則と酷似することを示し、一般性が非常に高い規則であることを強調する。

一般性の高い規則に従う外来語や複合名詞を使えば、効率の良い音声指導法が可能になる。また、カタカナ表記する外来語は初級者の音声指導に、そして漢字表記の多い複合名詞は中・上級者の音声指導に使える。形態と表記法は全く異なるが、同じアクセント規則に従う外来語と複合名詞を使った音声指導法の可能性も考える。

2. 5拍以上の外来語

まず、5拍以上の外来語のアクセント型について議論する。5拍以上の外来語は、平板型（例：アルコール、カリフォルニア）も存在するが、一般的には、(4) に示すように「語尾から数えて3番目のモーラを含む音節にアクセント核が置かれる (McCawley 1968) 」と言える（[-3]型規則）。

- (4) ストラ¹イキ、チョコレ¹ート、カレ¹ンダー、デラ¹ックス、コマ¹ーシャル、マクドナ¹ルド、ヒューマニ¹ズム、コンピュ¹ーター、インフルエン¹ザ

しかし、この従来の[-3]型規則では、次に示す外来語のアクセント核の位置を予測することができない。(語尾から3番目のモーラを含む音節を下線で示す。)

(5) ヘリコプター コミュニティー アレルギー² パースデー

つまり、アクセント核の位置は、語尾から数えて3番目のモーラを含む音節に置かれていない。このように、モーラと音節という単位だけでは、(4)と(5)の外来語のアクセント核の位置を同じように予測することはできない。しかし、音節より大きい単位(フット)を導入することにより、これらの外来語のアクセント核の位置を予測することが可能になる。この点を議論するために、[-3]型規則をフットを基礎にした韻律音韻論から再考することにする。

韻律音韻論 (Hayes 1995) では、音節は、モーラ数による質量(軽・重)によって1モーラからなる軽音節と2モーラからなる重音節に分けられる。さらに、日本語の1フットは、2モーラからなると考えられる (Poser 1990, Ito and Mester 1992, Katayama 1998, Shinohara 2000) ので、2軽音節(2モーラ)上、あるいは1重音節(2モーラ)上に構築されることになる。また、日本語のフットは、強弱相('Trochee')³だと考えられるので、フット内の2モーラの中で、左側が強モーラ、相対的に右側が弱モーラということになる。このように(強・弱)の2モーラからなるフットを2拍フットと呼ぶ。

まず、(4)に示した外来語の2拍フットは、語頭から構築されるのか、あるいは語尾から構築されるのかを議論する。仮に、2拍フットを語頭から、2軽音節上、あるいは1重音節上に、構築すると、次のようなフット型になる。

- (6) (スト)(ライ)キ、(チョコ)(レー)ト、カ(レン)(ダー)、デ(ラッ)(クス)、
 コ(マー)(シャル)、(マク)(ドナ)(ルド)、(ヒュー)(マニ)(ズム)、
 (イン)(フル)(エン)ザ、(コン)(ピュー)(ター)

また、2拍フットを語尾から構築しても同じ結果が得られる。

しかし、これらの外来語の中で「(マク)(ドナ)(ルド)、(ヒュー)(マニ)(ズム)」は、中央フットの右側のモーラにアクセント核がある。つまり強弱フット型にはならないためアクセント位置とフット型の関係をうまく説明できない。そこで、最後の音節を韻律外性単位（‘<>’で示す）として無視して、2拍フットを語尾から構築する方法を提案する(韻律外性単位については、稲葉 (2002) を参照されたい)。

(7) F[-3]型規則

- a. 語尾の音節は、韻律外性単位として、韻律構造から無視する。
- b. 語尾から重音節に、2拍フットを形成する。
- c. 語尾から左に向かって、2軽音節上に、2拍フットを形成する。
- d. アクセント核を、最右端フット核上に置く。

この F[-3]型規則により、次に示すようなフットが構築される。

- (8) (スト)(ライ)<キ>、(チョコ)(レー)<ト>、カ(レン)<ダー>、
 デ(ラッ)ク<ス>、コ(マー)シャ<ル>、マ(クド)(ナル)<ド>、
 (ヒュー)マ(ニズ)<ム>、(イン)(フル)(エン)<ザ>、(コン)(ピュー)<ター>

このように、5拍以上の外来語は、最後の音節を韻律外性単位として扱い、フットを語尾から構築した方が、アクセント核の位置とフットの関係をうまく説明できる。さらに、(5) に示した外来語も、F[-3]型規則に従い、(9) のようにフットを語尾から構築すれば、アクセント核の位置を同じように説明できる。

- (9) (ヘリ)(コ¹プ)<ター>、コ(ミ¹ユ¹ニ)<ティー>、ア(レ¹ル)<ギー>、
(バ¹ー)ス<デー>

従来の[-3]型規則では説明不可能であったデフォルトアクセント型が、フット（‘Foot’）という単位を導入した F[-3]型規則により、全て同じように説明できる。つまり一旦フットが構築されると、5拍以上の外来語のデフォルトアクセント核は「最右端フット（‘the rightmost foot’）に置かれる」と一般化できる。

3. 4拍の外来語

4拍の外来語のデフォルトアクセント型は、5拍以上の外来語のそれと同じように、[-3]型規則に従うと考えられてきた。例えば、『NHK 日本語発音アクセント辞典』（1998）に、「4拍（モーラ）以上の外来語は、終わりから数えて3拍目まで高く発音する」と明記されている。つまり4拍の外来語のアクセント型は、[-3]型規則により語尾から決定されることになる。これを韻律音韻論から検証する。

4拍の外来語は、音節構造の違いに従って、次の5種類に大別できる。（平板型を除く。）

- | | |
|------------|--|
| (10) a. 重重 | 例：エ ¹ ンジン、コーヒ ¹ ー |
| b. 重軽軽 | 例：ト ¹ ースト、アイデ ¹ ア |
| c. 軽軽重 | 例：ド ¹ クター、ビタ ¹ ミン |
| d. 軽軽軽軽 | 例：カ ¹ ジュアル、テキ ¹ スト |
| e. 軽重軽 | 例：オレ ¹ ンジ、ク ¹ リップ |

上記のそれぞれの音節構造の中で、次に示すアクセント型が一番多い (Katayama 1998)。

- (11) a. 重¹重 例：エ¹ンジン、シ¹ーズン
 b. 重¹軽軽 例：ト¹ースト、ゴ¹ースト
 c. 軽¹軽重 例：ド¹クター、ホ¹ルモン
 d. 軽¹軽軽軽 例：カ¹ジュアル、ビ¹ジネス
 e. 軽¹重¹軽 例：オ¹レンジ、ポ¹ケット

数が一番多いこれらをデフォルトアクセント型と見なし、フットが語頭から構築されるのか、あるいは語尾から構築されるのかを考察する。

語頭から2拍フット（2軽音節、あるいは1重音節からなる）を構築すると次のようなフット型になる。

- (12) a. (重¹)(重) 例：(エ¹ン)(ジン)、(シ¹ー)(ズン)
 b. (重¹)(軽軽) 例：(ト¹ー)(スト)、(ゴ¹ー)(スト)
 c. (軽¹軽)(重) 例：(ド¹ク)(ター)、(ホ¹ル)(モン)
 d. (軽¹軽)(軽軽) 例：(カ¹ジュ)(アル)、(ビ¹ジ)(ネス)
 e. 軽(重¹)軽 例：オ(レ¹ン)ジ、ポ(ケ¹ッ)ト

このように、語頭からフットを構築すると、アクセント核の位置とフット型の関係をうまく説明できる。次に、5拍以上の外来語においては、従来の[-3]型規則より適用範囲が広いことを証明した F[-3]型規則に従って、語尾から2拍フットを構築すると次のようなフット型になる。

- (13) a. (重¹)<重> 例：(エ¹ン)<ジン>、(シ¹ー)<ズン>
 b. (重¹)軽<軽> 例：(ト¹ー)ス<ト>、(ゴ¹ー)ス<ト>
 c. (軽¹軽)<重> 例：(ド¹ク)<ター>、(ホ¹ル)<モン>
 d. *軽¹(軽 軽)<軽> 例：*カ¹(ジュア)<ル>、*ビ¹(ジネ)<ス>
 e. 軽(重¹)<軽> 例：オ(レ¹ン)<ジ>、ポ(ケ¹ッ)<ト>

(13d) 以外の外来語は、アクセント核位置とフットの関係の説明できるが、(13d) は、アクセント核が存在する語頭の音節にフットが構築されていない

い。つまり、F[-3]型規則では、(13d) のアクセント型を説明できない。もちろん、従来の[-3]型規則でも、そのアクセント型を説明できない。確かに、4拍の外来語の中には、「軽¹軽¹軽¹」アクセント型をするものもある(例: プロ¹セス)。そこで、従来4拍の外来語も、5拍以上の外来語のように、[-3]型規則に従っていると考えられてきた。しかし、「軽¹軽¹軽¹」アクセント型の方が、「軽¹軽¹軽¹」アクセント型より数が多い (Katayama 1998)。つまり、4拍の外来語(デフォルトアクセント型)のフットは、語尾から構築されるのではなく、語頭から構築されると考えられる。そこで、本稿では、4拍の外来語のデフォルトアクセント型は、全て語頭から決定されると一般化する。しかし、一方で(13d)に示す「軽¹軽¹軽¹」型以外の4拍の外来語は、従来考えられてきたように、5拍の外来語のように[-3]型規則に従っているといえることも確かである。興味深いのは、Kubozono and Ogawa (2004)の研究で、「軽¹軽¹軽¹」型の外来語が、4モーラの外来語の中で、平板化する傾向が最も強いと報告されていることである。それが事実であれば、「軽¹軽¹軽¹」型は、フットが語頭から構築される頭高型という点で、[-3]型規則で説明可能な他の4拍の外来語とは明確に異なることから、平板化の原因がその特異性と関係しているのかもしれない。

4. 3拍の外来語のデフォルトアクセント型

『NHK 日本語発音アクセント辞典』(1998)には、2拍と3拍の外来語は、アクセント核が語頭に置かれる頭高型であると説明されている。3拍の外来語のアクセント型は、F[-3]型規則により、語尾から決定されるともいえるが、比較的短いため、2拍の外来語同様に、単純に語頭から決定される頭高型と考える方が確かに自然である。しかし、その理由は、『NHK 日本語発音アクセント辞典』(1998)には、明確に述べられていない。そこで、(14)に示す3拍の外来語のフットが、語頭から構築されるのか、ある

いは語尾から構築されるのかを韻律音韻論から議論する。

3拍の外来語の音節型は、「軽軽軽」、「重軽」、そして「軽重」の3種類が存在する。その音節構造の中では、(14)に示すように、語頭にアクセント核が存在する型が圧倒的に多い (Katayama 1998)。これらをデフォルトアクセント型と見なし、フットが語頭から構築されるのか、あるいは語尾からなのかを考察する。

- (14) a. 軽¹軽軽： 例：ク¹ラス、テ¹レビ
 b. 重¹軽： 例：タ¹ンク、ボ¹イス
 c. 軽¹重： 例：ハ¹ワイ、ギ¹ター

2拍フットは、2軽音節上、あるいは1重音節上に構築される。一方で、「重軽」、そして「軽重」型のフットは、語頭、あるいは語尾から構築されるのかは明らかではない。しかし「軽軽軽」の場合は、語尾からフットを構築すると、「軽(軽軽)」となり、アクセント核が語頭にあることを説明できないので、フットが語頭から構築されると考えられる。そこで、本稿は「重軽」と「軽重」の場合も、同様に語頭から構築されると考える。そして、「軽軽軽」、あるいは「重軽」のフットを語頭から構築すると、「(軽¹軽)軽」、「(重¹)軽」のようになり、アクセント核の位置を説明できる。しかし「軽¹重」音節構造をしている場合、重音節にまず2拍フットを形成すると「軽¹(重)」になり、アクセント核が置かれるはずの軽音節は、2拍フットを形成できずに孤立することになる。そこで「ハワイ、ギター」は、単拍フットの存在を認め、次の様なフット構造をしていると考えられる。

- (15) 軽¹重： (ハ¹)(ワイ)、(ギ¹)(ター)

第1音節は、2拍フットを構築できない単拍フット（‘Degenerate Foot’）⁴と

よばれる。Hayes (1995) は、単拍フットの禁止を提言しているが、音節核に主アクセントがある時だけ、単拍フットを認めるとしている（‘Weak Prohibition’）。そこで、本稿では、単拍フットを容認するために、van der Hulst (1984) の帰納的方法論に従って、フットが構築されると考える。つまり、通常主アクセント位置はフット構築後に決定されるが、van der Hulst は、主アクセントの位置からフットを構築する方法（‘top-down construction’）を提言している。この帰納的方法論は、フット構造から主アクセントの位置を知る通常の演繹的方法論とは異なるが、3拍の外来語の多くは、第1音節にアクセント核が置かれる（確定事実）ため、フット構造を知る上で有効な方法論である。つまり、「軽¹重」音節構造をしている「ハワイ、ギター」の場合、アクセント核は基底表示されていて、van der Hulst (1984) の帰納的方法論に従って、フットが (16c) のように、構築されると考えられる。これは、Hayes (1995) の「音節核に主アクセントがある時だけ単拍フットを認める（‘Weak Prohibition’）」に準ずる。

- | | |
|-----------------------------|---|
| (16) a. (軽 ¹ 軽)軽 | 例：(ク ¹ ラ)ス、(テ ¹ レ)ビ |
| b. (重 ¹)軽 | 例：(タ ¹ ン)ク、(ボ ¹ イ)ス |
| c. (軽 ¹)(重) | 例：(ハ ¹)(ワイ)、(ギ ¹)(ター) |

特記すべきは、「ハワイ、ギター」は、アクセント核が基底表示される点で、「クラス、テレビ、タンク、ボイス」とは異なる。さらに、比較的短い3拍の外来語のアクセント型から、単拍フットを許容してでもアクセントが第一音節に置かれるという傾向（頭高型）が見えてくる。一方、4拍の外来語のところでは触れなかったが、4拍の外来語の中には、3拍の外来語ほど数は多くないが、重音節に先行する軽音節にアクセント核が置かれる単拍フットの存在がある（ただし、このアクセント型「軽¹重軽」は、「軽重¹軽」より、はるかに数が少ないので、デフォルトアクセント型ではない）。例えば、「(コ¹)(ロッ)ケ、(ハ¹)(ミン)グ、(プ¹)(ディ)ング」など

がある。これらの例から、4拍の外来語の中にも、3拍の頭高型の外来語と同様に単拍フットを許容してでも、頭高型になるという傾向が見えてくる。興味深いことに「軽¹重軽」型は、‘揺れ’が許容される場合（例：コ¹ロッケ対コロ¹ッケ、バ¹ロック対バロ¹ック、パ¹レット対パレ¹ット）が多い。また、Yamura (forthcoming) は、4拍の外来語の研究で、最近頭高型を好む話者が多いことを報告している。つまり、「コ(ロ¹ッ)ケ」のような「軽重¹軽」が、今のところ、デフォルトアクセント型だと考えられるが、将来、「(コ¹)(ロ¹ッ)ケ」のような頭高型が、さらに認知されていくことが予想される。換言すると、比較的短い3拍と4拍の外来語には、単拍フットを許容してでも、頭高型になる傾向があり、F[-3]型規則に従う比較的長い5拍の外来語との区別がはっきりしてくることになる。しかし、この頭高型傾向については、5拍以上の外来語（例：ナ¹ショナルズ、ア¹クセサリー）にも見られることから、今後さらに研究が必要であることは言うまでもない。

5. 外来語のデフォルトアクセント型

まとめると、3拍と4拍の外来語のフットは、語頭から構築され、5拍以上の外来語のフットは、語尾から構築されると言える。

- (17) a. 3拍： (ク¹ラ)ス、(テ¹レ)ビ、(タ¹ン)ク、(ボ¹イ)ス、(ハ¹)¹(ワ)イ、
(ギ¹)¹(タ)ー
- b. 4拍： (エ¹ン)¹(ジ)ン、(シ¹ー)¹(ズ)ン、(ト¹ー)¹(ス)ト、(ゴ¹ー)¹(ス)ト
(ド¹ク)¹(タ)ー、(ホ¹ル)¹(モ)ン、(カ¹ジュ)¹(アル)、(ピ¹ジ)¹(ネ)ス
オ(レ¹ン)ジ、ポ(ケ¹ッ)ト
- c. 5拍以上： (ス)ト(ラ¹イ)<キ>、(チ)ョコ(レ¹ー)<ト>、カ(レ¹ン)<ダー>、
デ(ラ¹ッ)ク<ス>、コ(マ¹ー)シャ<ル>、マ(ク)ド(ナ¹ル)<ド>、
(ヒ)ューマ(ニ¹ズ)<ム>、(イ)ン(フル)(エ¹ン)<ザ>、
(コ)ン(ピ)ュー<ター>

5 拍以上の外来語のデフォルトアクセント核は、「最右端フット (‘the rightmost foot’) に置かれる」と一般化した。3 拍と 4 拍を含めて、さらに「非語尾・最右端フット (‘the non-final, rightmost foot’) に置かれる」と一般化することができる。具体的に例をとって説明する。例えば「(エン)(ジン)」の場合、右端のフット、「(ジン)」は語尾にある(語尾フット)ため、ここにはアクセント核は置かれず、非語尾のフット、「(エン)」に置かれることになる。また、「オ(レン)ジ」の場合、唯一のフットは、「ジ」の存在(残存音節⁵: ‘Stray Syllable’)があるため、非語尾フットになり、そこにアクセント核が置かれることになる。まとめると、外来語のデフォルトアクセント型を韻律音韻論から考察し、3 拍と 4 拍の外来語のフットは語頭から決定され、5 拍以上の外来語のフットは語尾から決定されることを議論した。そして、一旦フットが構築されると、デフォルトアクセント核の位置は、「非語尾・最右端フット (‘the non-final, rightmost foot’) に置かれる」と一般化できることを明らかにした。

6. 複合名詞のデフォルトアクセント型

モーラ(拍)単位を基礎にした先行研究(Tsujimura and Davis 1987、佐藤 1989、上野 1997、秋永 2001)は、後部要素(N2)が2拍以下の‘短い’複合名詞と3拍以上の‘長い’複合名詞に分けている。一方、Kubozono (2002)⁶は、フットを基礎にした複合名詞の研究で、N2を4拍以下と5拍以上に分ける一方で、複合名詞のアクセント核は、「非語尾・最右端フット (‘the non-final, rightmost foot’) に置かれる」と一般化して、フットを基礎にした分析方法の優越性を強調している。

稲葉(2004)では、複合名詞をN2が4拍以下と5拍以上に分け、複合前のN2のアクセント位置に関わらず、N2が5拍以下の複合名詞のフットは、(N1・N2)の境界から左右に向かって構築され、5拍以上の複合名詞のN2のフットは、F[-3]型規則により、N2の語尾から左に向かって構築される

ことを議論した。また、N2 が 4 拍以下の複合名詞は、(N1・N2) の境界の最初の軽音節に、レキシカルアクセント（基底表示されたアクセント）が存在する時、単拍フットを認めた。これに基づきフットを構築した複合名詞を (18) に示した。N2 ≥ 5 拍の複合名詞の範例は、語境界の影響を避けるために、N2 は外来語の場合が多くなった。⁷

(18) 複合名詞の境界

N2 ≤ 4 拍（フットは、N1 と N2 の境界から構築される。）

N2 = 1 拍：	例：(にゅう)(じ)・き	(乳児期)
	げ(か)・い	(外科医)
N2 = 2 拍：	例：(ネバ)(ダ)・(しゅう)	(ネバダ州)
	(しん)(り)・(がく)	(心理学)
	(ほう)(てい)・(しき)	(方程式)
N2 = 3 拍：	例：(ごま)・(あぶ)ら	(ごま油)
	き(ろく)・(えい)が	(記録映画)
	(こう)(つう)・(い)(はん)	(交通違反)
N2 = 4 拍：	例：(いん)が・(かん)(けい)	(因果関係)
	ほ(けん)・(けい)(やく)	(保険契約)
	(せい)じ・(か)つ(どう)	(政治活動)
	(くち)・(やく)(そく)	(口約束)
	(えい)(よう)・ク(リー)ム	(栄養クリーム)

境界線

N2 ≥ 5 拍（フットは、F[-3]型規則により語尾から構築される。）

例：	(やま)・(ほと)(とぎ)<す>
	カ(スピ)(かい)・(ヨー)(グル)<ト>
	(ニュー)ス・(ハイ)(ライ)<ト>
	(ホット)・(カプ)(チャー)<ノ>
	(はな)・カ(レン)<ダー>
	(げっ)(かん)・グ(ラン)プ<リ>
	(パリ)・コ(レク)<ション>
	(ハッ)(ピー)・(バー)ス<デー>

以上のように、N2 が 4 拍以下の複合名詞と N2 が 5 拍以上の複合名詞のフット構築過程は異なるが、一旦フットが構築されると、デフォルトアクセント核の位置は、「非語尾・最右端フット（‘the non-final, rightmost foot’）に置かれる（Kubozono 2002）」と一般化することができる。

7. ラテン語の主強勢規則

英語の強勢 (Stress) 位置は、全て基底表示されていると考えられてきた時代がある。つまり、話者は強勢位置を全て覚えて置く必要があると考えられていた。しかし、その考え方は、Lieberman and Prince (1977) 以来、見直されるようになってきた。つまり、Lieberman and Prince (1977) は、英語話者に ‘podectal’ のような語尾から 2 番目が重音節である無意味語を発音させると、‘podéctal’ と発音する話者がいても、‘pódectal’ と発音する話者はいないことを指摘している。そこで、それぞれの語の主強勢は、規則的な決まりによって付与されると考えられるようになってきた。品詞毎のやや煩雑な英語の主強勢規則の詳しい説明は、Spencer (1996) に譲るが、その中核を成す主強勢規則は、次に示すラテン語の強勢規則に等しい。

(19) ラテン語主強勢規則 (Hayes 1995)

- a. 主強勢は、語尾から 2 番目の音節に置かれる。
- b. もし、その音節が軽音節なら、語尾から 3 番目の音節に置かれる。

この強勢規則は、語尾から 3 番目までの音節が関与するので、軽音節、あるいは重音節との組み合わせは、次に示す 8 種類が可能になる。実際のラテン語の強勢位置を ‘ ’ 、語尾境界を ‘#’ で示す。(強勢は、音節核に置かれる。)

(20) ラテン語の主強勢位置

- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| a. ...軽重’軽# | b. ...重重’重# | c. ...重重’軽# | d. ...軽重’重# |
| e. ...軽’輕輕# | f. ...重’輕輕# | g. ...軽’軽重# | h. ...重’軽重# |

不規則に見えるラテン語主強勢位置は、(19) に示す主強勢規則によって予測できる。Hayes (1995) は、Liberman and Prince (1977) を発展させ、右端の音節を韻律外性的と捉え、リズム構築から無視されるとした。そして、‘Moraic Trochees’ (強弱モーラ相) に従い、2拍フットを構築すると、(20) は次のように表される。(韻律外性の最右端音節を ‘< >’ で表す。)

(21) ラテン語の主強勢とフット

- a. ...軽(重')<軽># b. ...(重)(重')<重># c. ...(重)(重')<軽>#
 d. ...軽(重')<重># e. ...(軽'軽)<軽># f. ...(重')軽<軽>#
 g. ...(軽'軽)<重># h. ...(重')軽<重>#

これらの音節構造に対応する外来語を (22) に示す。

(22) 日本語のアクセント位置とフット

- a. (スト)(ラ¹イ)<キ># b. (コン)(ピ¹ュー)<ター># c. (ハイ)(ラ¹イ)<ト>#
 d. カ(レ¹ン)<ダー># e. マ(クド)(ナ¹ル)<ド># f. コ(マ¹ー)シャ<ル>#
 g. コ(レ¹ク)<ション># h. (バ¹ー)ス<デー>#

(21) に示す主強勢位置とフットの関係は、(22) に示す5拍以上の外来語のデフォルトアクセント核の位置とフットの関係に等しいことが分かる。⁸

8. 結論と日本語教育への提言

『NHK 日本語発音アクセント辞典』(1998) に、「4拍(モーラ)以上の外来語は、終わりから数えて3拍目まで高く発音する」と明記されているが、本稿は、韻律音韻論から考察して、大多数(デフォルトアクセント型)の4拍の外来語(例: エ¹ンジン、オレ¹ンジ、バ¹ロック)は、2拍、3拍(例: バ¹ス、サ¹ン、キ¹ー、ゴ¹ルフ、タ¹ンク、ハ¹ワイ)の外来語と同様に、フットは、語尾からではなく、語頭から構築される頭高型だと一般

化した。(注:「オレ¹ンジ」は、従来の考え方では頭高型だといえないが、フットが語頭から構築されるので頭高型の範疇に含まれる。)ただし、4拍の外来語(頭高型に比べて数が少ないため、デフォルトアクセント型に含まれていない)の中に、5拍以上の外来語の様に[-3]型規則が適用される「軽¹軽²」音節の外来語(例:サディ¹ズム、セレ¹クト、デフォ¹ルト、パプ¹リカ、プロ¹セス)の存在が確認されること、そして「軽¹軽²軽³」型外来語を除く4拍の外来語のアクセント型も[-3]型規則で説明可能なことから、4拍の外来語は、3拍と5拍以上の外来語両方の特徴を備えているともいえる。

一方、5拍以上で、[-4]型⁹の外来語(例:コマ¹ーシャル、アレ¹ルギー、ヘリコ¹プター)や[-5]型の外来語(例:バ¹ースデー、パ¹ートナー)のアクセント核位置は、[-3]型(例:ヨーグ¹ルト、マクドナ¹ルド)と同様に、F[-3]型規則によって予測できる。ただし、「ビタ¹ミン、バーベ¹キュー、カンガ¹ルー」の様に、重音節に先行する軽音節にアクセント核が置かれる特殊なケース「...軽¹重² #」も存在する。興味深いことに、窪菌(1996)の報告によると、「...軽¹重² #」の80%が「...重¹軽²重³ #」や「...軽¹軽²重³ #」のアクセント型(つまり、F[-3]型規則に従う型)に移行しているという。そこで、F[-3]型規則が、共通語において益々大きな役割を果たしているといえる。

また、窪菌・太田(1998)は、共通語における単純語(和語・漢語)のアクセント型は、平板型を除けば、3モーラ語の頭高型(例:「そ¹うむ、て¹んき、にゅ¹うじ)や語尾から3番目にアクセント核がある中高型(例:「なで¹しこ、ひま¹わり、ほとと¹ぎす)が大多数であると報告している。これが事実であれば、日本語学習者は単純語毎にアクセント核位置を全て覚えなければならないとする一般的な見解を見直すことができる。つまり、日本語学習者は、膨大な数に上る単純語のアクセント核位置を頭高型、あ

るいは F[-3]型として少なからず予測できることになる。ただし、学習者には、4拍の単純語は、4拍の外来語のような頭高型ではなく、5拍の外来語のように F[-3]型規則に従うということを教えることが大切である。4拍の単純語は F[-3]型規則に従い、4拍の外来語は頭高型であるという違いは、一貫性を欠いているように思えるが、4拍の外来語とところで議論したように、4拍の外来語のうち、「軽¹軽¹軽¹」型は頭高型になる傾向がある一方で、それ以外の4拍の外来語は、全て F[-3]型規則に従っているともいえる。

F[-3]型規則は、さらに複合名詞のアクセント型においても、重要な役割を担っている。稲葉 (2004) は、N2 が4拍以下と5拍以上に分け、N2 が4拍以下の複合名詞のフットは、複合前の N2 のアクセント位置に関わらず、(N1・N2) の境界から左右に向かって構築され、5拍以上の複合名詞のフットは、F[-3]型規則により、N2 の語尾から左に向かって構築されることを議論した。そして、N2 が5拍以上の複合名詞のデフォルトアクセント核の位置は、複合前の N2 のアクセント核の位置が前もって分からなくても、F[-3]型規則によって予測できることを議論した。つまり、複合名詞に関しても、F[-3]型規則が大きな役割を果たしていると言える。

まとめると、F[-3]型規則は、外来語の中核をなすアクセント規則であるというだけでなく、単純語、複合名詞、さらにはラテン語においても適用される非常に汎用性が高い規則であると言える。そこで、日本語学習者が F[-3]型規則を効率良く習得できれば、正しいアクセントで日本語を話すために、大いに役に立つに違いない。

学習者に F[-3]型規則を効率良く習得させる例として、アクセント核の位置を外見から予測し易い外来語から順に導入しながら、パターン毎に多くの範例を示して指導する方法が考えられる。具体的には、まずアクセント核の位置を簡単に予測できる外来語、つまり語尾から単純に数えて3番目のモーラにアクセント核が置かれる外来語 (例：マクドナ¹ルド)、次に語

尾から3番目のモーラが特殊拍（長音、撥音、促音）で、アクセント核が前へ1モーラずれる外来語（例：コマ¹ーシャル）、そして従来[-4]型として扱われてきた外来語（例：ヘリコ¹プター）と順次導入していく。これらのアクセント型は、一見異なるようだが、全てF[-3]型規則に従う外来語なので、一貫した音声指導をしていることになる。また、カタカナ表記する外来語は初級者の音声指導に、そして漢字表記の多い複合名詞は中・上級者の音声指導に使える。形態と表記法は全く異なるが、同じF[-3]型規則に従う外来語と複合名詞を使った音声指導法の可能性が広がる。さらに、汎用性の高いF[-3]型に加えて、3拍、4拍の外来語に見られる頭高型の重要性をも認識した実用的な発音指導法が、日本語音声教育現場で考えられていくことを期待したい。

注

- 1 Katayama (1998) は、外来語を最適性理論（‘Optimality Theory’: Prince and Smolensky 1993）から分析し、制約群のランク付けによって外来語のアクセント型を説明できるとしている。本稿は日本語教育に根ざした実用的な言語理論の構築を目指した視点で外来語を分析し、アクセント核が置かれるフットだけ（‘non-iterative’）でなく、フットが繰り返し構築される（‘iterative’）と仮定し、学習者がリズム型（フット型）を目で確認できることに主眼を置いた。一方で、Katayama (1998) のアクセント型の統計データを利用させてもらったことに対しては心から感謝したい。
- 2 「アレル¹ギー」型も、『NHK アクセント辞典』（1998）に記載されているが、本稿は、全て最初に記載されているアクセント型を採用した。
- 3 Yamada (1990) は、外来語のアクセントを強弱フット型（‘trochaic feet’）で、Tateishi (1991) は、弱強フット型（‘iambic feet’）で議論している。Kubozono (1995, 2002) は、複合名詞を、基本的には強弱フット型で分析しているが、一部弱強フット型も認めている。Kager (1993) は、弱強フット型での分析は、強弱フット型で再分析できることを議論している。本稿では、Kager (1993) に従い、弱強フット型を完全に排除して、強弱フット型を基本に議論する。
- 4 Ito and Mester (1992) は、単拍フットを完全に禁止している。Kubozono (1995) は、単拍フットを複合名詞の分析で一部認めている。Hayes (1995) は、単拍フット（‘Degenerate Feet’）を完全に規制する‘Strong Prohibition’と一部認める‘Weak Prohibition’を提言している。

- 5 2拍フットを構築できない音節は、残存音節 ('Stray Syllables') と呼ばれ、後に隣接する2拍フットに連結されると考えられる。
- 6 Kubozono (2002) は、4拍以下の複合名詞のアクセント型は前もってN2のアクセント型が分からなければ予測出来ないとしている。さらに Kubozono (2002) は、弱強相 (Iambic) のフット型を認めている。それらの点で、稲葉 (2004) は Kubozono (2002) と異なる。
- 7 $N2 \geq 5$ 拍の複合名詞で、語境界の影響のない和語や漢語は少ない。例えば、「艦隊・司令官」は、従来 $N2 \geq 5$ 拍として扱われたが、語境界の影響が考慮されていなかった (稲葉 2004)。つまり「司令官」は、すでに複合名詞 (「艦隊・司令・官」) である。
- 8 外来語には、「輕輕¹重」(例: ビタ¹ミン)、「重軽¹重」(例: バーベ¹キュー) などのアクセント型があるので、ラテン語の主強勢型とは多少異なる。しかし外来語のデフォルトアクセント型だけに限ると、そのアクセント核の位置はラテン語の主強勢位置に等しい。
- 9 ここでの[-3]型、[-4]型、[-5]型は、従来のよび方で、「アクセント核が語尾から何番目にある」という意味で使った。

参考文献

- 秋永一枝 (2001) 「東京アクセントの法則について」『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
- 稲葉生一郎 (2002) 「長い複合名詞のリズムとアクセント—韻律音韻論からの考察—」『日本語教育論集・世界の日本語教育 第12号』163-74
国際交流基金 日本語国際センター
- 稲葉生一郎 (2004) 「複合名詞のアクセント規則とリズム指導—学習者支援を目指した韻律音韻論からの考察—」『言語学と日本語教育 III』137-56
くろしお出版
- 上野善道 (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子 (編) 『日本語音声2』231-270 三省堂
- 窪菌晴夫 (1996) Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation. 『音声学会会報』(日本音声学会) 211号 71-82
- 窪菌晴夫・太田聡 (1998) 『音韻構造とアクセント』(日英語比較選書10)
研究社
- 佐藤大和 (1989) 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代子編『日本語の音声・音韻(上)』233-265 明治書院

- NHK (編) (1998) 「複合名詞と発音とアクセント」NHK 放送文化研究所編
『日本語発音アクセント辞典』付録 30-62 日本放送出版協会
- Hayes, B. (1995). *Metrical stress theory (Principles and case studies)*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Ito, J., & Mester, A. (1992). Weak layering and word binarity. *University of California at Santa Cruz, Linguistics Research Center Report*, 92-109.
- Kager, R. (1993). Alternatives to the iambic-trochaic law. *Natural Language and Linguistic Theory*, 11(3), 381-432.
- Katayama, M. (1998). *Optimality theory and loanword phonology*. Ph.D. Dissertation. University of California at Santa Cruz, 1-226.
- Kubozono, H. (1995). Constraint interaction in Japanese phonology: Evidence from compound accent. *Phonology at Santa Cruz (PASC)*, 4, 21-38.
- Kubozono, H. (2002). Syllable weight and Japanese accent. *The Proceedings On-Line of Linguistics and Phonetics 2002*. Meikai University.
- Kubozono, H., & Ogawa, S. (2004). Emergence of unaccented words in Japanese. *Proceeding of the 2nd International Conference: Speech Prosody 2004*, 33-36.
- Lieberman, M., & Prince, A. (1977). On stress and linguistic rhythm. *Linguistic Inquiry*, 8(2), 249-336.
- McCawley, J. (1968). *The phonological component of a grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- Poser, J. W. (1990). Evidence for foot structure in Japanese. *Language*, 66(1), 78-105.
- Prince, A., & Smolensky P. (1993). *Optimality theory: Constraint interaction in generative grammar*. Technical report, Center for Cognitive Science, Rutgers University. New Brunswick, N.J., and Computer Science Department: University of Colorado, Boulder.
- Shinohara, S. (2000). Default accentuation and foot structure in Japanese: Evidence from Japanese adaptations of French words. *Journal of East Asian Linguistics*, 9(1), 55-96.
- Spencer, A. (1996). *Phonology*. Massachusetts: Blackwell.
- Tateishi, K. (1991). Maximal non-exhaustive invisibility. *Proceedings of 14th Annual Meeting of the Kansai Linguistics Society*, 134-144.
- Tsujimura, N., & Davis, S. (1987). The accent of long nominal compounding in Tokyo Japanese. *Studies in Language*, 11(1), 199-217.
- van der Hulst, H. (1984). *Syllable structure and stress in Dutch*. Dordrecht: Foris.

- Yamada, E. (1990). Stress assignment in Tokyo Japanese. *Fukuoka Daigaku Jinbun Ronsoo*, 21, 1575-1604. Fukuoka: Fukuoka Daigaku.
- Yamura, A. (forthcoming). *Accent placement in 4-mora loanwords in Japanese*. M.A. Thesis. San Jose State University.